

六連島灯台

関門海峡の西方に浮かぶ小島に立つ灯台。六連島灯台は 1871 年、海峡を挟んで対になる部埼灯台と共に建設された。日本最古の石造灯台のひとつである。「日本の灯台の父」と呼ばれるリチャード・H・ブラントン（1841-1901）が明治政府の依頼で設計した。このような顧問、指導者、技術者が 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、日本の近代化のために海外から多数招聘された。

この灯台は、現在も近くにある石造りの礁標とともに、関門海峡を行き交う数多くの国際貿易船を導いてきた。何十年もの間、海峡の安全を保つことに貢献してきた灯台だが、その誕生は国際紛争によるものであった。

江戸時代（1603-1867）が終わりに向かい、内紛で徳川幕府の力が弱まってくると、京都の朝廷が国政への介入をするようになった。1863 年、孝明天皇（1831-1867）は外国勢力の日本からの追放を希望した。長州藩（現在の山口県の一部）の勤王志士達は、海峡を通過するアメリカやヨーロッパの船に大砲を向け、欧米列強はこれに武力で応じた。1864 年、英仏蘭米の連合軍が砲撃し下関の町に侵攻し、紛争の決着がついた。その余波で、戦勝国は日本に対して、より多くの港を外国貿易のために開くことを要求した。その後、この灯台を含むいくつかの灯台が、重要な航路を安全に通るために建てられた。